
【VOCALOID】ボクも痛車になりたいな

ピーナッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【VOCALOID】ボクも痛車になりたいな

【コード】

N5088BA

【作者名】

ピーナッツ

【あらすじ】

初音ミクのほか、あの痛車キャラが出てきます。

「ミク姉、今日鈴鹿サーキット行くんでしょ？ ボク一緒に行ってもいい？」

ピザトーストを齧りながらレンが聞いた。

ボカロ家、朝の食卓。

ミク、ルカ、リン、レンの四人が揃ってテーブルを囲んでいる。

鈴鹿サーキットでは明日からスーパーGT300の予選が始まる。

そのため、今日は雑誌やテレビの取材が集中するのだ。

ミクの今日のスケジュールはグッド・スマイル・レーシングの一員として雑誌やテレビの取材に対応することである。

グッド・スマイルは、初音ミクのイラストがデカデカとプリントされた、いわゆる痛車でレースに参戦している。

このイラストには一万人の個人スポンサーがついており、チームを支える柱の一つとなっているのだ。

レンはそれについて行きたいと言っている。

草食系ながらも男の子だから、レースカーには興味があるようだ。

「うーん、やめといた方がいいと思うけど…はたで見るほど華やかでもないよ」

いつもは万事に大らかなミクが、珍しく渋い顔をする。

「邪魔にならないように大人しくしてるからさ、いいでしょ」

「連れてってあげたら？ 男の子なんだからさ、いい思い出になる

わよ」

ルカが助け舟を出した。

「ルカがそう言うんなら連れてくけど…勝手にあっちこっち行っちゃダメよ。絶対にはぐれないでね」

「わーい！ やったあー！」

手を上げて喜ぶレン。対してミクは難しい顔をしている。

…ミク姉、お祭りごとは嫌がっても無理やり連れてくタイプなのに、変なの。

リンは不思議に思った。

快晴の鈴鹿サーキット。

ピットは迫力あるエンジン音で満ちている。

どのチームも明日の予選を控え、マシンの調整に余念がない。

レンはミクの痛車を前に興奮していた。

「うわー！ 超カッコいい！ いーなー、ボクも痛車になりたい」

目を輝かし、運転席の窓ガラスに顔をくっ付けて中を覗きこむレン。ピット内のあらゆるものをグルグルと見て回る。

ミクはチームのスタッフと打ち合わせをしつつ、浮かれたレンが勝手にどこかに行ってしまうないように目を配る。

「レン、あんまりウロチヨロしないで。約束したでしょ」

注意すると一旦はおとなしくするのだが、またすぐに目移りが始まる。

スタッフの一人がミクに声をかけた。

「ミクさん、モーター誌の記者が着いたそうです。取材は応接室になるので、移動をお願いします」

「分かりました。レン、行くわよ」

工具箱をあさっていたレンを呼びつける。

「伊蔵をつけますから、ご一緒をお願いします」

「いつもの人？」

「はい」

「レンがいるのよ。もう一人付けられる？」

「手配済みです。応接室はレース場の北側で、歩いて五分ほどです。お気をつけて」

スタッフの後ろから、二人の男が現れ、ミクに一礼する。

チームのメンバーと同じのツナギを着ているが、腕には警備会社の腕章をしている。

ツナギは場内で目立たないようにするためか。

二人とも大柄で背が高く、K-1選手のように逞しい。

「南原さん、あそこのレースクイーンから傘借りてくれる？ 念のため」

ハイと返事をして、南原と呼ばれた男はミクの指示に従った。暑いから差して歩くのかと思ったが、南原は畳んだまま先導し始める。

「ミクさん、こちらです」

警備の二人に前後を挟まれて、ミクとレンは歩き出した。

「ミク姉、後ろの人がイゾウさん？」

レンがミクの横に並び、小さな声で聞いた。

「違うわ。伊蔵ってのは、符丁よ」

「フチヨウ？」

「グッド・スマイルでボディガードのことをそう呼んでるの。明治時代に人斬り伊蔵って腕利きの剣客がいて、勝海舟の用心棒もしたことがあるのよ。それにちなんでね」

ずっとはしゃいでいたレンの顔に、初めて不安の色が浮かんた。

「何でボディガードが必要なの？」

「色々物騒なのよ。言ったでしょ、華やかなだけじゃないって」

真っ直ぐ前を向いたミク表情は、いつになく引き締まっている。こんな顔を見るのは初めてだ。

「傘は…？」

「うーん、説明しにくいわね。多分使わないと思うよ」

要領を得ない答えだ。レンはますます不安になる。

ピット周辺は人がごった返していたが、階段を登り二階に上がると急に人気がなくなった。

長い廊下を歩いていると、前を歩いていた南原が足を止めた。

前から白いワンピースを着た少女と、スタッフジャンパーを着た背の高い男が歩いてくる。

男の腕には警備会社の腕章。少女のボディーガードか。

「おや、初音ミクじゃないカ」

ミクを認めて少女も足を止める。

年頃はリンと同じくらいだろう。頭に三角形の変な帽子を被っている。

腕を組み挑戦的な目でミクを睨む。ミクも一歩前に出て睨み返す。

「あら、何か生臭いと思ったら、あんただったの」

少女はカチンときた顔をした。

青色の長い髪　いや、頭から生えた触手のようなものが、ゾワゾワと動き出す。

レンはビククリした。

「ミ、ミク姉、誰？　この人？」

「LMP MOTORSPORTとこの痛車キャラ、タコ女よ」

「イカ娘でゲソ！！ 間違えんなでゲソ！！」

イカ娘が憤慨する。

「男連れでデート気分かでゲソ。のん気じゃなイカ」

あからさまな挑発だが、ミクは動じない。

「あんたこそこんなところで遊んでないで、早く海の家に戻って焼きそばでも作ってなさいよ」

イカ娘が顔を引きつらせる。

「お前こそ帰って歌でも歌ってたらいいでゲソ！」

「あたしはそれが本業だからいいけど、あんたの本業は何でしたっけ？ 地上を侵略するんじゃないの？」

見事に揚げ足を取られ、イカ娘が悔しがる。

「うう！ バカにするなでゲソ！ 目にももの見せてやるでゲソ！！」

口では敵わないとみると、すうっと大きく息を吸い込んだ。レンが何をするんだらうと見ていると、イカ娘はいきなり口から大量の黒い液体を吹き出した。

「わっ！！」とレンが叫ぶ。

動きを読んでいた南原が素早く傘を開き、ミクを守る。

大きな日傘が真っ黒に染まったが、ミクには一滴もかからなかった。傘を除けるとミクは先ほどと寸分違わぬ姿勢で立っていた。

「そこをどきなさい！！ さもないと触手固結びにしてツインテールにするわよ！！」

ミクの貫録勝ちである。

「く、くそ〜！ 覚えてろでゲソ〜！」

イカ娘は悔しそうに泣きながら走り去った。

ボディーガードが慌てて後を追う。

レンは何が起こったのか分からず呆然としていた。

南原がイカ墨まみれの傘を畳み、廊下の隅に投げ捨てる。

「船井、LMPに電話してイカ墨を掃除するよう言え。それとレン君のシューズも弁償させろ」

そう言われてはじめて、レンは自分の靴にべっとりイカ墨がついているのに気が付いた。

「だー！ こ、これお気に入りなのに…」

「それくらいで済んでよかったじゃない。さ、行くわよ」

ミク達は再び歩き出した。レンも慌てて遅れないようについて行く。最後尾の船井が歩きながら携帯でLMPに電話している。

「ミ、ミク姉、何でイカ娘と仲悪いの？」

「あいつだけじゃないよ。痛車キャラの本分つてのがあってね」

ミクは変わらず前を向いたまま話した。

「道を譲った方がレースで負けるってジンクスがあるのよ。だから絶対に引き下がっちゃいけないの」

「それでボディガードが…」

遅れを取り戻すように早足で歩くミク。

レンは必死でついて行く。

「で、でも、危ないよ。ケンカになったりしたら…。ただのジンクスでしょ？」

「あたしには一万人の個人スポンサーがついてるの。尻尾を巻いて逃げることは許されない。痛車になるってのは、そういうことよ」

ミクはきっぱりといった。険しさを秘めた横顔は、普段ののほほんとした彼女とは別人のようだ。

レンは言葉を失った。

「それにね、あんなスルメ女なんか可愛いものよ。もっと海千山千のツワモノが…」

廊下の角を曲がったミクが、話の途中でまた足を止めた。

先ほどのイカ娘の時とは比較にならない緊張が走る。

ハツとしてレンが前を向くと、白いプラグスーツを着た女が、凄まじい存在感を漂わせて立っていた。

彼女ならレンも知っている。エヴァンゲリオンの初号機パイロット、

綾波レイだ。

マフィアみたいな黒いスーツの四人の男が、姫を守る騎士のように彼女を囲んでいる。

ミクと眼が合うと、綾波は冷たく微笑んだ。

二人は約三メートルの距離を置いて向かい合っているだけだが、間の空気は刃物のように鋭く張り詰めていた。

「ミク、久し振りね」

「そうね」

ただの挨拶なのに、切っ先が触れ合う音が聞こえてきそうだった。

「坊やも一緒なの？ お姉ちゃんにしっかりくっついて、迷子にならないようにね」

イカ娘とは比較にならない毒の吐きようだ。

「心配は要らないわ。レイもボディガード減らしたら？ 男に囲まれていい気分になってるんなら、それでもいいけど」

一瞬綾波の眼が険しくなったが、すぐに冷笑を取り戻す。逆上したら負けだという不文律があるのだ。

「ミク、ピットから来たの？」

「…そうよ」

「歩くときは気をつけたほうがいいわ。髪にオイルが付いている」

えっ、と言ってミクは左右のツインテール見た。

しかし、どこにもオイルなど付いていない。

しまったと思つて前を向くと、綾波が口を押さえてクスクス笑っている。

頭に血が昇るのを感じたが、こらえて表情に出さないようにする。

「あんだこそ注意しなさいよ。ピットインする車にはねられて、包帯だらけにならないようにね」

それは言つちやダメ、とレンはミクの口を塞ぎたい思いに駆られたが、すでに割つて入ることなど到底できない状況だった。

綾波の顔から微笑が消え、恐ろしい眼でミクを睨みつけた。

ひるむことなく睨み返すミク。視線がぶつかり合い、激しく火花が散る。

「イントネーションがおかしいのよ。歌はどうか知らないけど、ホント喋るの下手くそね!」

レンにはミクがギリツと歯を軋ませる音が聞こえた。

「ここで油売ってる暇があったら、パチンコ屋の営業でも行ってくれば!?! そっちの方が実入りはいいんでしょ!?!」

「ちやほやされてアイドル気分になつてんじゃないわよ! 音符通り歌うだけのオモチャのくせに!?!」

「あんだこそ碇ゲンドウのオモチャでしょうが!?!」

剣で斬りつけるような舌戦が続き、レンは恐ろしくて気絶しそうになつた。

二人は再び眼から炎が出そうな勢いで烈しく睨み合った。

「…ミク、ミク…さん…」

ミク達の後ろから、消え入りそうな声が聞こえた。

振り向くとグッド・スマイルのレースクイーンがひどく怯えた様子で立っていた。

「…あ、あの…雑誌の記者の方が、車の前で写真を撮りたいそう場で場所がピットに変更になったそうです…すみません、戻ってもらえますか…」

声も身体もガタガタ震えている。

可哀想に、きつとさつきからそこにいたのだろうが、怖くて声をかけられなかったのだろう。

ミクが綾波に向き直る。

「面白くなってきたところなのに、残念だね。レイ、またね」

さらりとそう言って、踵を返す。

レンも後を追うため、綾波に背を向けた。

「レン」

歩き出そうとした背中に綾波から名を呼ばれて、レンは飛び上がった。

おそろおそろ振り返るが、怖くて返事もできない。

「…わたしの親衛隊には、荒っぽいのもいるからね。せいぜいお姉ちゃんとはぐれないように気をつけなさい」

脅かすつもりかと思っただが、綾波の表情は静かだった。

「レン、行くわよ」

ミクは振り返りもせずそう言って、ツカツカと歩き出した。

レンは何も言えず、ミクの後に従うしかなかった。

廊下の角を曲がるまで、背中に綾波の視線が貼り付いているような気がした。

ピットに帰ったレンは、もうあちこちうろつくことはなかった。

綾波の視線を思い出すと、背筋に冷たいものが走る。

ミクにくっ付いていたいのだが、報道陣に囲まれていて近づけなくなってしまった。

仕方なくレンはパイプイスに座ってコースを走る車を眺め、時間をつぶしていた。

「ミク姉すごいな……。よく綾波レイなんかと対等に渡り合うよ……。痛車になるのって、大変なんだな……」

一人凹んでいるレンに、スーツ姿の若い男が声をかけた。

「レン君、後でテレビ局が来るから、ミクさんと一緒に出てもらえるかな。それまで別室で待機しててよ。ゲームもあるよ」

「はい」

ミクと別行動するのは少し不安だったが、ゲームに釣られてレンは

立ちあがった。

スーツの男についていく。

男は明るく世間話をしながら案内した。話しているとレンも気がまぎれた。

しかし、すぐ近くだろうと思っていた控え室には、なかなか着かない。

そのうちだんだん人気がなくなってきた。

「あの、まだかかるんですか？ 控え室って…」

「ああ、もうすぐだよ」

男が不自然なほどにこやかに微笑む。

(わたしの親衛隊には、荒っぽいのもいるのよ)

綾波の言葉が脳裏をよぎる。

怖くなったレンは、隙を見て反対方向に駆け出そうとした。

しかし、後ろを向いた途端にレンは別の男の腹にぶつかってしまった。

叫ぼうとした口を塞がれ、両手も押さえられる。

レンは引きずられるようにして建物の影に連れ込まれた。

スーツの男とは別に、もう一人、ジーンズの男も現れ、レンは三人の男に囲まれる形になった。

レンを捕まえている男はデブで異様に腕力があり、身動きが取れない。

「お前の姉貴、レイ様にずいぶんなめたマネしてくれたなあ」

スーツの男は豹変し、陰惨な顔つきになった。

「恨むんならお前の姉貴を恨めよ。おい、いいか、顔は殴るな。服で隠れるところだけにしろ。ヘッドセットは外しておけ」

指示を受けてジーンズの男が頷き、レンのヘッドセットに手をかける。

レンはもがいたが、まったく振りほどくことができない。

「あんた達、何してるの」

場にそぐわない、静かな女の声。スーツとジーンズの男が振り向く。声の主は、綾波だった。

「レ、レイ様…」

男達の目が見開かれる。レンは縛り付けていた手が緩んだ隙に逃げ出した。

何故だか、あれほど怖かった綾波が救いの天使に見えて、レンはその背中に隠れた。

スーツの男が愛想笑いを浮かべ、取り繕おうとする。

「レ、レイ様、これは…」

「馬鹿なことしてくれたわね…あいつら捕まえてちょうだい。警察に引き渡して」

後ろに控えていた黒服のボディガードが、男達を取り押さえる。綾波がレンの頭の上にそっと手を置いた。

「ミクから離れるなって言ったでしょ。脅しじゃないのよ」

綾波は微笑みこそしなかったが、その顔は穏やかだった。

「レン！ あ！ いた！！！」

ミクが姿を現した。急にいなくなったレンをずっと探していたのだ。レンに駆け寄り、抱きしめる。走り回ったのか、息が荒い。

後からグッド・スマイルのスタッフもやってきた。みんな胸をなでおろす。

ミクはホツとすると周りの状況を確認した。

人気のない建物の陰。綾波のボディガードに取り押さえられた、ガラの悪い男達…。

「レイ、あなた…」

状況を把握しきれないミクが、疑いの目を向ける。

「ち、違うよ！ ミク姉！ レイさんは、ボクを助けてくれたんだよ！」

泣きそうな顔をしていたレンが、慌てて綾波を弁護する。ミクはやつと事態を呑み込んだ。

「そういうこと。ミク、子供を一人にするんじゃないわよ」

綾波は無表情に言った。

ミクがもう一度レンをギュッと抱きしめる。

「礼は言わないわよ。あなたの親衛隊でしょ」

ミクは厳しい顔を崩さない。

「もちろんよ。逆に謝らなくちゃ。ごめんね、レン」

ミクではなく、レンに綾波は謝った。

言っていることは穏やかなのに、綾波はこんな時も笑みを見せない。レンは小さくうなずいた。

その時、辺りに携帯の着信メロディーが響いた。

グルーヴ感のあるトランステクノ。

聞き覚えのあるメロディーに、ミクとレンは、アレ？ と顔を見合わせた。

ボディーガードの一人が、持っていた小さなバッグから携帯を取り出し、綾波に差し出す。

プラグスーツで荷物を持ってない綾波に代わって持ち歩いているのだろう。

綾波は、いつも冷静な彼女にしては珍しく、ひったくるようにして携帯を受け取った。

すぐに着信ボタンを押す。

「レイ、今の、あたしの…」

ミクには構わず、綾波は電話の相手と話します。

「はい。ええ、こっちは用は済みました。すぐ向かいます」

携帯を閉じると、綾波はミクの視線を避けるように向こうをむいた。一瞬、頬がつつすらと赤くなっているのが見えた気がした。

「行くわよ」

ボデイガードとともに歩き出す綾波。
ミクは思わず「待って」と声をかけた。
綾波に駆け寄る。警戒したボデイガードが、素早く綾波の盾になる。

「…いいの、どいて」

肩を押してボデイガードを横にどける。

綾波がミクに歩み寄った。

至近距離で向かい合う二人。

ミクが、すっと綾波の耳元に顔を寄せる。

ボデイガード達に一瞬緊張が走った。

ミクが綾波の耳に何か一言ささやく。

それだけだった。

ミクは少女のような笑みを見せると、あとは何も言わず立ち去った。

レンとグッド・スマイルのスタッフが急いで後を追う。

綾波はそのまま立ちつくして、ミクの背中を見送った。

それから、溜息か苦笑いか分からない息を吐き、その場を後にした。

一週間後。 昼下がりのポカロ家。

珍しく仕事もなく、昼間から四人揃っている。

玄関のチャイムが鳴ったので、リンが出た。

宅配便が二箱のダンボール箱を持ってきていた。

サインして荷を受け取る。

「レンと、ミク姉にね。誰からだろ…」

荷札を見たリンの顔が青くなる。

「ちょ、ちょっとー！ みんな来てー！！」

荷物は綾波レイからだった。リビングに四人が集まる。

「ど、どうするの？ 絶対爆弾とかそんなんだよ」

リンはこの前の痛車騒動の話でレンから聞いて以来、綾波をひどく恐れている。

「レイさんそんなことしないって、いい人だって言ってるでしょ」

レンがそう言っても舌戦の話ばかりが印象に残っているのか、聞くとうとしない。

ルカはリンほどには綾波を恐れていないが、中身の想像がつかず、考え込んでいる。

「考えたってしょうがないでしょ。レン、開けてごらん」

ミクが促すと、レンはガムテープをビーツと剥がした。

リンはいつ爆発してもいいようにクッションで頭を防御し、壁の向こうから片目だけ出して見守っている。

ダンボールの蓋を開けると、発泡スチロールの緩衝材の中から、もう一つ紫色の箱が出てきた。

「わ！ レイの痛車ラジコンだ！」

GTレースで走っている綾波の痛車と同じデザインだ。

公式グッズの一つなのだろう。
レンが喜んで箱を開ける。でかい。車長四十センチくらいありそうだ。

「うおー！ 超カッコいい！」

アルカリ電池も入っていたので、レンが早速セットする。
ルカは他に何か入っていないかとダンボールの中をあらためる。
小さなカードが入っていた。

『この間はゴメンね』

ただそれだけが書いてあった。

ミクが首を伸ばしてカードを見る。

「まったく、無愛想ね。ハートマークくらい書けばいいのに」

リンも部屋の隅から這い出してきた。

「へー、レンの言うとおり、いい人なのかな」

「じゃあ次はあたしのね」

ミクが自分宛のダンボールのテープを剥がす。

「わあ！ 本命だ！ ミク姉は絶対爆弾だよ！」

リンが慌てて部屋の向こうへ逃げ出す。

箱の中には、ビニール製の手提げ袋。中身は…服？

ミクが襟らしき部分をつかんで引きずり出す。

出てきたものは、白いプラグスーツだった。

「わお！ やったあ！ レイのプラグスーツだ！」

意外な中身に、ルカとレンも驚きの声を上げる。レンも駆け寄ってきた。

「な、何で綾波レイがミク姉にプラグスーツを送るの!？」

綾波に『極道の妻たち』的なイメージしか抱いていなかったリンは、訳が分からない。

ミクは立ち上がって身体の上からサイズを合わせた。

「あ、ピッタリっぽい。さすがレイ、サイズ調べてくれたんだ」

ルカとリンはますます不思議顔になる。レンがハッと何かに気付いた。

「ミク姉、この前のレイさんとの別れ際、何をささやいたの？ 秘密って言ってたけど」

ミクはプラグスーツを身体に合わせ、リビングの鏡に映して喜んでいる。

「うーん？ ああ、あのこと？ もうばらしちゃうね。『あたし、レイのプラグスーツ着てみたい』って言ったんだ」

三人がまた驚きの声を上げる。

「ミ、ミク姉、あの状況でそんなこと言ったの…度胸ありすぎる…」

「だって、レイたんったら、あたしの曲着信音にしてくれてるんだもの。あたしも本音で話さなくちゃ」

あきれ顔のレン。レンは二人の対決を思い出すと、今でも鳥肌が立つというのに。

「あ、そうだ。お礼言わなくちゃ」

ミクは携帯を取るとメールを打ち出した。

「ミ、ミク！ あなた綾波レイのメアド知ってるの!?!」

今度はルカが驚く。

「うん、あの日ね、後でグッド・スマイルのスタッフに頼んで、レイにメモ渡してもらったんだ。スタッフの人すっごく恐かったって言ってたけど。レイからちゃんと来たよ、メール」

「いったいどんなやり取りしてるのよ…?」

「教えたげない。でもレイのメール、いつも素っ気ないよ。そこがまた可愛いけどさ。…『今度うちに遊びに来て』って」

「きゃあ！ ミク姉！ 何打ってるの！ ホントに来たらどうすんのよ…!」

リンが携帯を奪い取るが、画面には『送信を完了しました』の文字。

「もう送っちゃったよ」

「ひいひい！ 綾波レイが来る…！ ど、どうしよう、ルカ姉」

青い顔で怯えるリンを、ルカがなだめる。

「大丈夫、ちゃんともてなせば、取って食やしないわよ」

そういうルカの額にも斜線が入っている。
プレゼントをもらったミクとレンだけが、浮かれて喜んでいた。

東京都心、ワンルームマンションの一室。

極端に物が少ない殺風景な部屋で、綾波は遅めの昼食を摂っていた。
テレビもなく、物音といえばときおりコンビ二弁当のパスタをすす
る音がするだけだ。

ひどく寂しい静寂を、ミクの明るい歌声が破る。メールの着信音だ。
携帯を開き、受信ボタンを押す。液晶の灯りがぼんやりと顔を照ら
す。

綾波の口元にほんの少しだけ笑みが浮かんだ。

「札幌か…。二日休みがあれば行けるかしら」

窓の外を眺める。

家に閉じこもっているのがもったいないくらい、空は晴れわたって
いる。

北海道はまだ寒いのかな。

たまには外に出て、暖かい服でも買ってこようかしら。
携帯をパタンと閉じ、綾波は出かける支度を始めた。

おわり

おまけ

『ボクも痛車になりたいな』の後日談です。

三週間後、富士スピードウェイの廊下で、ミクと綾波レイは再び鉢合わせた。

レンの事件があつてから、ミクのボディガードは二人に増えた。

綾波は相変わらず四人の黒スーツに囲まれている。

鈴鹿の時と同じように、二人は三メートルの距離を置いて睨みあった。

「レイ、ちょっと…」

ミクが右手の人差し指を曲げてレイを呼んだ。

ミクは廊下の隅に歩いていく。

ついて来ようとするボディガードを、掌をかざして制する。

綾波がミクに歩み寄った。

警戒するボディガードたちに、「離れてて」と一言つぶやく。

ミクと綾波は、肩が触れ合いそうな距離に近づいた。

身体を壁の方に向けているので、表情は見えない。

ボディガードたちは、何かあつたときはすぐ動けるように、緊張を保ったまま二人を注視している。

ミクが綾波にボソボソと話しかけた。声が小さすぎて、周りの者に内容は聞こえない。

「レイ、あたしが送った服届いてんでしょ？ 何で写真送ってこないのよ」

「そんな約束してないわよ」

「レイがあたしのプラグスーツ着たとこ見たいって言うから写真送ったんじゃない。あなたも送るのがスジでしょ」

「ええ、ええ、たくさん送ってくれてありがとう。ダウンロードするのに三十分かかったわよ。でもそもそもあなたの服送ってなんてわたし頼んでないわよ」

「着て写真送るのが付き合いつてもんでしようが。まさか着てもないんじゃないでしょうね？」

「…着たわよ、一応。何なのよ、あのやたら窮屈なラツパ袖とブーツ。あれ着て脱ぐのに四十分かかったわよ。あたしの七十分どうしてくれるのよ」

「着たならついでに写真撮りなさいよ。言っとくけど、写真送らなかつたらレイが札幌来てもうちの敷居またがせないからね」

「あんだ、このあたしに一人で部屋の中で初音ミクのコスプレして、三脚立てて写真撮れって言うてんの？」

「碇シンジでも呼んで撮らせりゃいいじゃない」

綾波のこめかみの辺りで何かプチツと切れる音がした。

「呼べるわけないでしょ！！ あんたみたいなコスプレオタクじゃないのよ！ わたしは！」

レイの突然の大声に、ボディガード達に緊張が走る。

「誰がコスプレオタクよ！ 全部あたしがオリジナルなんだからね！」

「あんたスペチャンとかソニックとかやってんでしょ！ そういうのコスプレって言うのよ！」

「うっさいわね！ あんたも年中その暑っ苦しいプラグスーツ着んのやめなさいよ！ 中あせもだらけなんじゃないの！？」

「わたしはあんたみたいな節操無しじゃないのよ！ そんなんだから痛車はBMWのくせにトヨタのCM出たりすんのよ！ スジ通せつての！」

「アメリカだからいいでしょ！ あんたこそ無表情キャラで売ってたくせに明るく学園物出てんじゃないわよ！」

今にもつかみ合いが始まりそうな勢いだったので、各々のボディガードが二人を羽交い絞めにして引き離れた。

二人は唸る犬のように睨み合っていたが、結局それ以上は争わず、互いに道を譲る形で別れた。

今日は引き分けといったところだが、仲が良いのか悪いのか分からない二人である。

三日後、ミクのパソコンに綾波からメールが届いた。
殺風景な部屋でミクの服を着て、内股で腰を前に突き出した例のポーズを決める綾波の写真が添付されていた。
眉をひそめた表情からは、「何でわたしがこんなことを」という声が聞こえてくるようだ。
本文にはひとこと、「流出させたら殺す」と書いてあった。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088ba/>

【VOCALOID】ボクも痛車になりたいな

2012年1月14日00時54分発行